

「旧上田藩上塩尻村佐藤家系譜」
近世日本の百姓的世界において
家系図が作られたのはなぜか

比較家族史学会シンポ準備
中間報告（2024/6/22）
長谷部 弘

「近世日本（旧上田藩上塩尻村）」

- 長谷部弘（東北大学名誉教授）

「旧上田藩上塩尻村佐藤家系譜」（近世日本の百姓的世界で家系図がなぜ作られたのか）

- 山内太（京都産業大学）

「旧上田藩上塩尻村清水家系譜」

- 岩間剛城（近畿大学）

「旧上田藩上塩尻村馬場家系譜」

コメンテーター 森本一彦（高野山大学）

日本経済史研究における家系図研究の意味

家系図：近世の歴史研究においてはさほど重要視されなかった？

理由

- 一次資料ではない
後代に一定の目的で作為的に作成されたもの
→ 歴史的事実性における疑義
- 家系に関する社会経済史的な問題関心の薄さ
→ 宗門人別改帳を用いた人口史研究に比べ
人口変動や人口構造を分析するデータとして
正確性を欠く → 資料性の低いという評価？
→ 再検討の必要あり

古代史、中世史研究

→権門勢家を含めた氏、家研究での補足

近世史研究→社会内部の実態を扱う分野

→由緒書と系図

(村内政治秩序・社会秩序への関心)

我々の研究課題との関連

村落社会内部の共同性の実態構造を明らかに

- 『近世日本の地域社会と共同性: 近世上田領上塩尻村の総合研究:I (近世上田領上塩尻村の総合研究 I)』 (刀水書房、2009)
- 『飢饉・市場経済・村落社会: 天保の凶作からみた上塩尻村 : 近世上田領上塩尻村の総合研究 別巻』 (刀水書房、2010)
- 『近世日本における市場経済化と共同性: 近世上田領上塩尻村の総合研究 II』 (刀水書房 2022)

本報告の問題関心

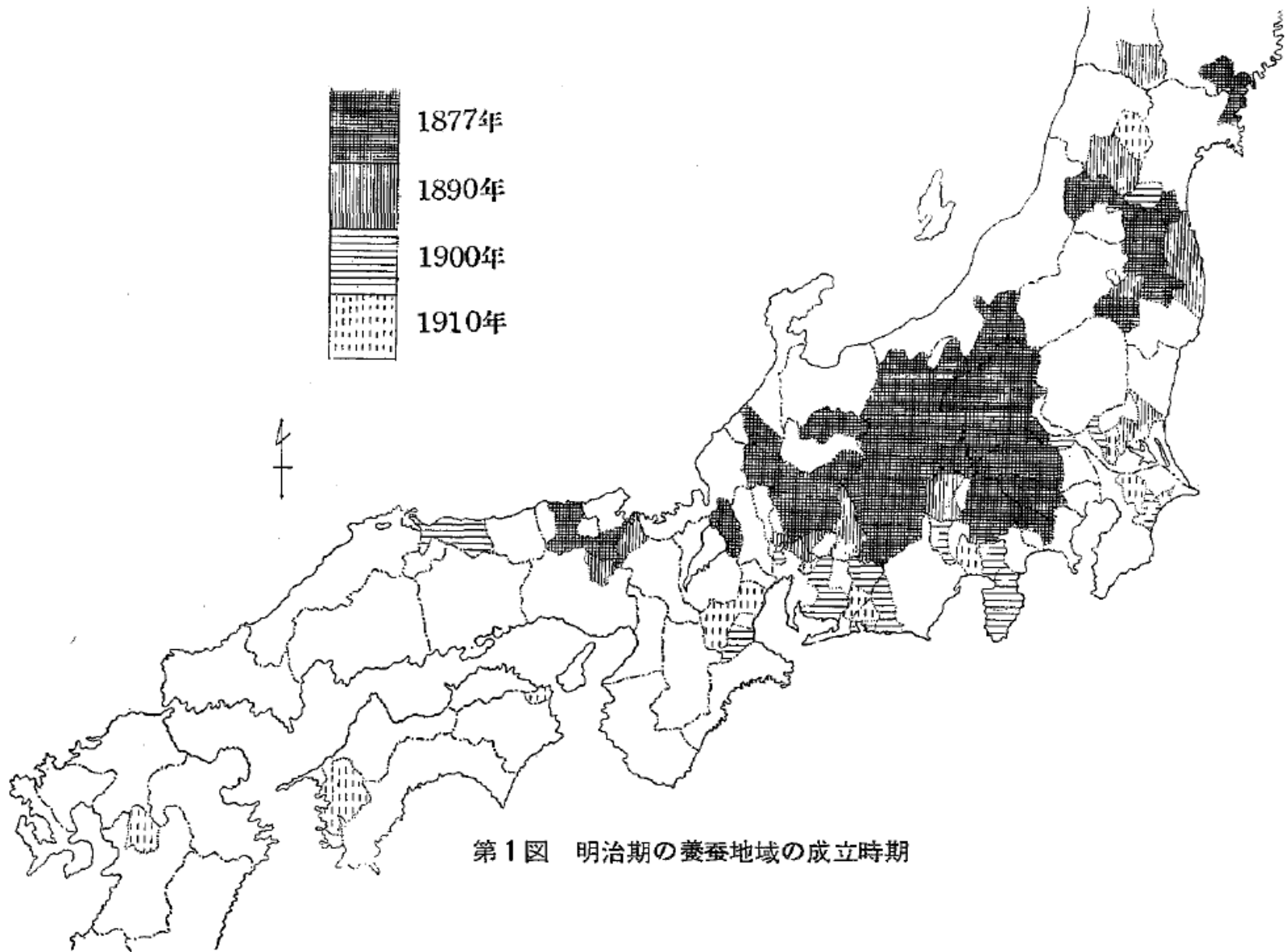
- 近世日本社会において人口の8割を占めた農村社会在住「百姓」身分の人々が家系譜、家系図に関心を持ち始めたのはなぜか？
- 背景に、18世紀半ばから日本列島各地で一斉に拡大し始めた市場活動＝市場経済化
- 家業、家産、家名、家格を持つ村落社会在住の「百姓」身分の「家」という家族集団
- 社会経済的に上昇する家族集団が一定時期に一斉に家系図を作成する現象が見られた？

- ・ 佐久地方から上田を超えて長野まで、千曲川沿の諸地域の資料調査から見えてくる書事実

→ 19世紀前半期の庶家記録の中に、自家の家系譜記録とともに、村内村外の家々についての家系譜記録がさまざまな形で残されている

→ 自家の資産、家格と釣り合う家々の間で婚姻関係を取り結ぶために、家々の血筋を確認する「家系」情報が必要であった？

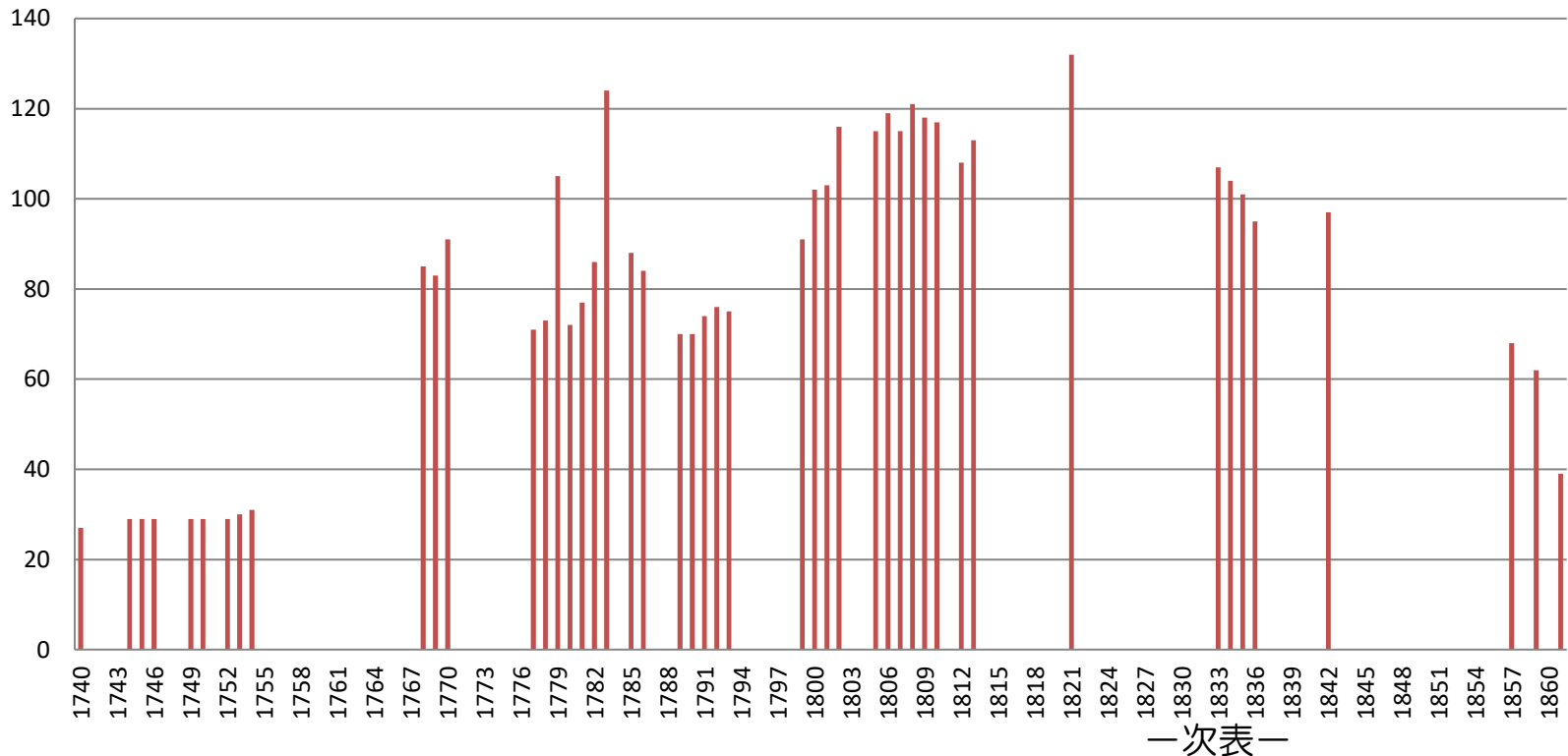
→ 背景には、18世紀半ばから活発化する養蚕業と蚕種業の展開



第1図 明治期の養蚕地域の成立時期

新井寿郎「明治年代における本邦の養蚕地域の成立」
 (『歴史地理学紀要』47-75、1966) 郡単位、桑園率、集繭量／耕地面積

上塩尻村における蚕種商旅出願者数の変化



- ①1730年代に村内百姓層が自前+地元仕入蚕種を上州で販売するために毎年蚕種商いで村外へ
- ②1770年代～80年代が最初のピーク（市場拡大・競争的市場）
- ③1790年代が停滞的（天明飢饉の影響と寛政改革による市場低迷）
- ④1800年代～1820年代が二番目のピーク（1801年神明講仲間組織による市場取引の安定化。関東以外の地域へ市場拡大）。
- ⑤ 1830年代以降、上田藩の産物会所政策による安定化。
- ⑥1840年代、株仲間解散令と蚕種市場の自由化・混乱？

上塩尻村の蚕種商活動

○「当国種売之義者、享保之頃より追々多人数ニ相成、國方仕入ニ而者引当不申奥州得仕入ニ罷下り、本場蚕種並ニ、二本松領共仕入仕候」

※天保12年「在町商物一件訴状写」（佐藤嘉平次文書 I 933）

①享保期に開始開始。②地元仕入れから奥州仕入れ（蚕種本場信達地方と二本松）へと変化（「種商」の旅は製造蚕種販売と奥州からの仕入れ・販売のため）

→これは資料的に確認できるか？

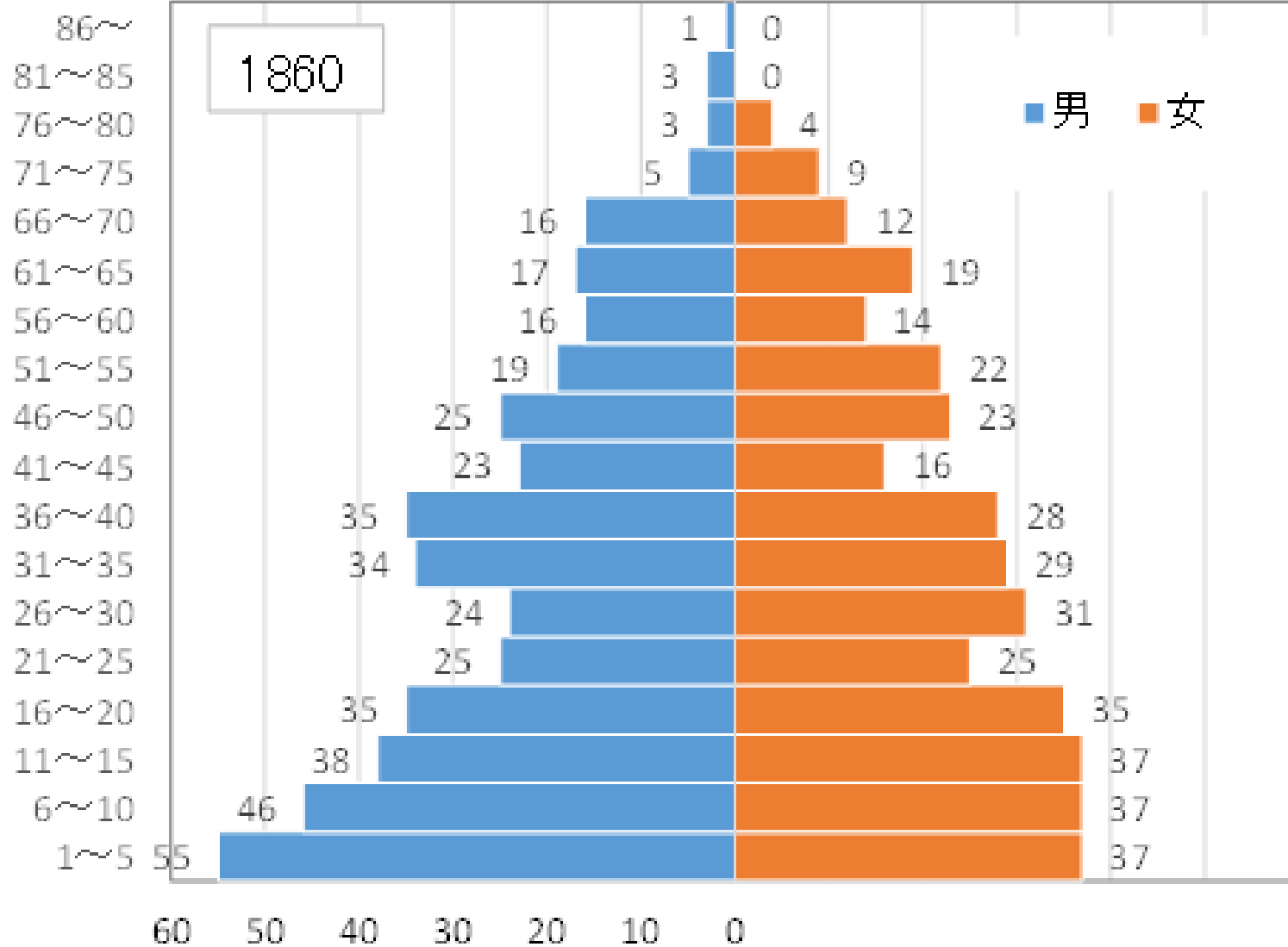
○蚕種商の開始時期について

- ・享保16（1731）年に小前騒動「庄兵衛一件」が発生
- ・享保17（1732）年「万願書並出人請状控帳」には関連記載なし。
- ・元文5（1740）年の「万願書御注進書控帳」に27名の関東筋（北上州の沼田・我妻、また南上州の松井田・下仁田・高崎辺）へ蚕種商に出かけるための鑑札願いが出されているのが初出。

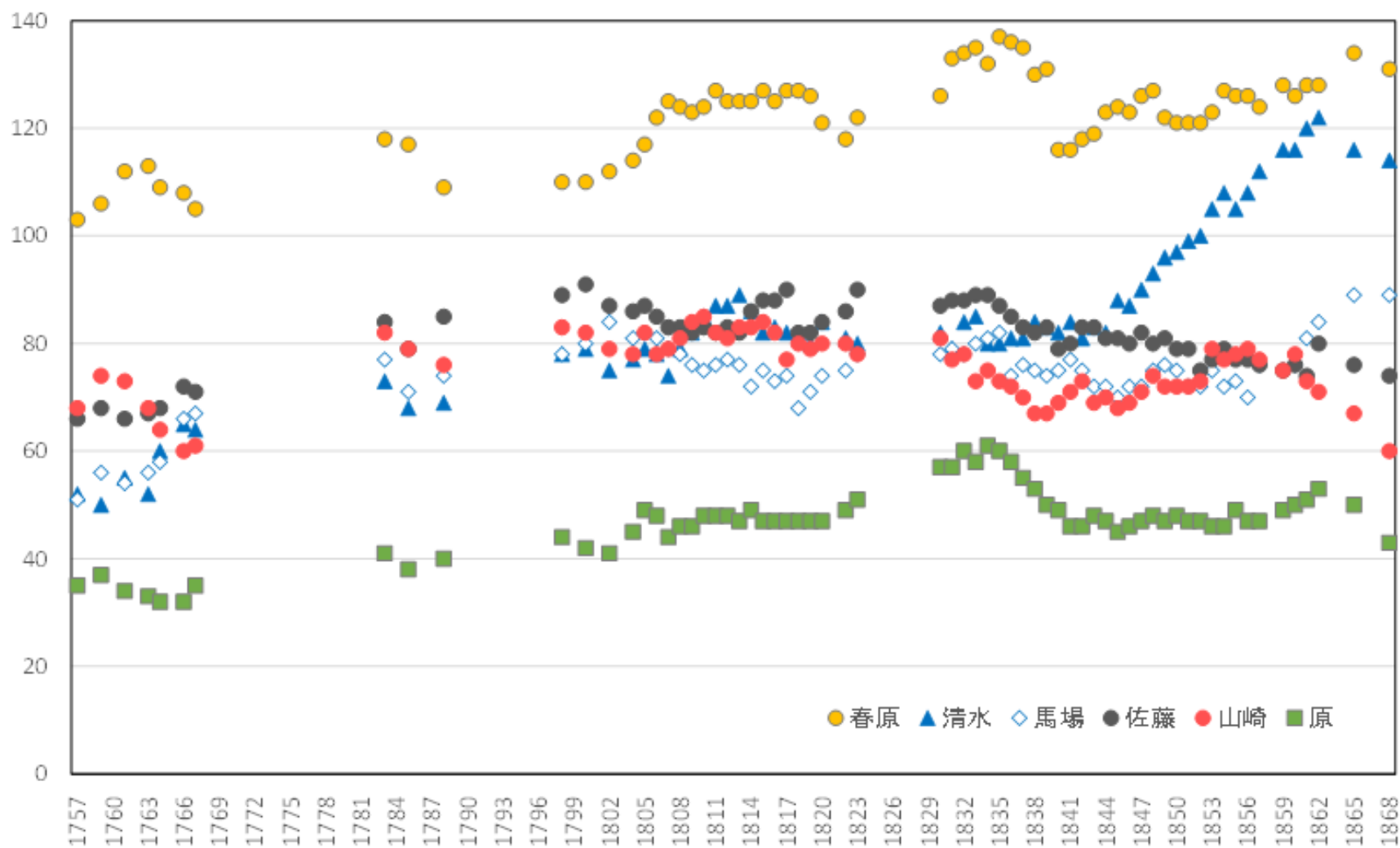
※佐藤善右衛門家は、すでに享保8（1723）年に結城種取引を行い、さらに元文2（1737）年になると自家製造した蚕種（金丸？）を関東筋に相場を見ながら販売したうえで秋に「掛取」（前貸し代金の回収）の旅に出ており、享保年間1730年代から種売が行われ始めたことはほぼ間違いないと考えられる。

村全体

0 10 20 30 40 50 60



村山良之作成



主要マケ別 人口

男 から\へ	佐藤	清水	山崎	馬場	原	春原	高遠	滝澤
佐藤	6							
清水	1	1	1	1				
山崎				1				
馬場		1		2				
原					4			1
春原						7		1
高遠							2	
滝澤		2						1

村内の婚姻養子等のマケ間移動 主要マケ 男
 佐藤 (6/6) , 春原 (7/8)

上塩尻村の家系譜「諸家代次」帳論（全4冊）

- 佐藤善右衛門家の第一分家

「八郎右衛門家文書」の中に豪華製本として

- 幕末弘化年間（1840年代）に作成？

- 内容

八郎右衛門家を軸に、佐藤一族の家々に関する系譜情報が記載（1冊め）

2冊目以降は、「村之部」と記載され、村内主要6家のみならず、ほとんどの家々の系譜を網羅

- 戦国末期16世紀が始原

→作成目的：幕末期、武士的社会秩序と百姓的村落社会
佐藤マケの村落内における家格付？

弘化年間における家系譜作成に用いた文書資料

「文禄ヨリノ代次名前帳」

(佐藤マケの家々に写しが残存)

→ほとんどが村落内「庄屋文書」

→朱で様々な非行政文書情報が記録

残存していない村内情報記録の存在？

幕末期の伝承情報？

宗門人別改帳情報を補填する情報として家の継承と相続の経緯を明らかにするために「民俗情報」利用。

八郎右衛門家

- 佐藤マケ第一分家 17世紀末分家自立
- 1690年代庄兵衛の代に本家善右衛門家を凌駕して佐藤マケの筆頭格の家に。村内最大の家産。
上塩尻村庄屋役を務める
- 享保16（1731）年「庄兵衛一件」
→小前騒動 庄屋役を降り、一時村外追放
- 本家佐藤善右衛門家とともに蚕種取引
- 以後、第一分家として、マケ全体を束ねる本家の活動を補佐
※嘉平次家相続一件での補佐
- 幕末期の活動

八郎右衛門家の家系図作成

- 蚕種製造販売活動による家業・家産の蓄積
- 村内の家々における「家格」意識の拡大
→婚姻等の必要から家系図作成の社会的動き
- 八郎右衛門家の「家格」意識
17世紀末～18世紀前半に村内最大の自家を
中心とするマケを形成した経験
本家に対する補佐と自立
→自分の家を筆頭とする家系図作成に
→佐藤マケ全体に→村内のマケ全体に